

毛詩注疏 卷第十 小雅 南有嘉魚篇 譯注稿

田中和夫

凡例

○ 《毛詩正義》本文は足利學校秘籍叢刊（汲古書院影印）《毛詩註疏》を底本とした。（簡稱、足利本）

○ 足利本の他、次の諸本を用いて校勘を行っている。異體字については必要と判断される場合にのみ注記し、原則的には校勘を行わない。

① 宋 槧本《毛詩正義》（卷八至卷二四）東方文化叢書、影印本（簡稱、單疏本）

② 元 中國國家圖書館藏《毛詩註疏》元刻明修本。中國國家圖書館藏本、「中華再造善本」北京圖書館出版社影印。（簡稱、元刊本）

③ 明 嘉靖年間刊《毛詩注疏》內閣文庫藏（簡稱、閩本）

④ 明 萬曆十四年 北京國子監刊《十三經註疏》本（簡稱、監本）

⑤ 明 毛氏汲古閣刊《十三經注疏》本（簡稱、毛本）

⑥ 清 乾隆四年武英殿校刊、乾隆十三年重刻《十三經注疏》本（簡稱、殿本）

⑦ 清 文淵閣四庫全書《毛詩注疏》本（簡稱、全書本）

⑧ 清 嘉慶二十年南昌府學開雕阮校勘《十三經注疏》本（簡稱、阮本）

⑨ 宋 宋人魏了翁《毛詩要義》、日本天理大學圖書館所藏宋淳祐

十二年徽州刻本（『域外漢籍珍本文庫』、西南師範大學出版社・人民出版社影印。簡稱、徽州本）。更に光緒丙戌江蘇書局開雕を用いた（簡稱、光緒本）。

文章の意味を取る上で必要と思われる部分は適宜括弧をつけて内容を補った。

毛詩注疏 卷第十（注一） 小雅 南有嘉魚篇

南有嘉魚之什詁訓傳第十七

毛詩小雅 鄭氏箋 孔穎達疏

注

（一） 卷第十 足利本・元刊本、「毛詩註疏」卷第十・阮本では毛詩注疏卷第十。單疏本は毛詩正義 卷第十六。全書本では、「毛詩注疏 卷第十七」

「南有嘉魚」樂與賢也。太平之君子、至誠、樂與賢者共之也。「南有嘉魚」は賢と與ともにするを樂しむなり。太平の君子、至誠にして賢者と之を共にするを樂しむなり。

であったことが分かる。

「南有嘉魚」の詩は（已に位に在る君子が、在野の賢者を朝廷に招いて、共に朝政を担うことができ）、楽しく燕飲することができたらと願って作られた詩である。（周王朝初期の周公・成王の）太平な時代、（已に位に在る）君子は、真心込めて、（在野の賢者を朝廷に招き入れて、）朝政を共にになうことができたらと、願ったものである。

（鄭氏箋）樂得賢者、與共立於朝、相燕樂（注1）也。

鄭箋：賢者を得て、與に共に朝に立ち、相燕樂するを楽しむなり。

鄭箋…（既に位に在る君子が、在野の）賢徳有る者を（朝廷に）招いて、共に朝廷の 列位に立ち、酒宴を催し飲びを共にすることを願う。

注

（1） 燕樂 『經典釋文』に「音洛、下注同。」とある。

〔疏〕南有嘉魚四章四句至共之

○正義曰、作「南有嘉魚」之詩者、言樂與（注1）賢也。當周公・成王太平（校1）之時、君子之人、已在位有職祿、皆有至誠篤實之心、樂與在野有賢徳者、共立於朝（注2）而有之、願俱得祿位、共相燕樂、是樂與賢也。經四章皆是樂與賢者之事。

校正

（1） 太平 足利本・單疏本・元刊本・閩本・毛本 殿本・阮本、「太

平」に作る。監本、「大平」に作る。『經典釋文』に「大平、音泰。後大平皆同。』『釋文』の基づいたテキストは「大平」

注

（1） 樂與 『經典釋文』に「音洛、又音岳。徐、五教反。序文同」

（2） 於朝 『經典釋文』に「朝、直遙反。下注同」とある。

〔疏〕「南有嘉魚」四章、章ごとに四句より共之まで

○正義：「南有嘉魚」の詩を作ったのは、「樂與賢（賢者と與にするを楽しむ）」を言わんとしたためである。周公・成王の太平の時代、君子である人は、已に位に就いていて職祿を有しており、皆至誠篤實の心を懐いている。彼等は（まだ祿位を得ていない）在野の賢徳有る者と共に朝廷に立つて（朝政を）担っていきたいと楽しい、自分たちと同じようにその人達も祿位を得て、彼等と共に相宴樂したいものと願っている。というのが「樂與賢也（賢と與にするを楽しむ）」ということである（『經典釋文』の音注は、「樂」に楽しむの意と、宴樂の意味との両用の意があることを指摘するものか）。経文の四章、すべてこの「樂與賢者」の事をうたっている。

〔第一章〕

南有嘉魚 南に嘉魚有り 南方の河にはたくさん魚がいる

烝然罩罩 烝然として罩罩 人々は待ちかねたかのように何度も捕

獲の籠をかける

（毛傳）江漢之間、魚所産也。罩罩、筥也。

箋云、烝、塵也。塵然猶言久如也。言南方水中有善魚、人將久如而

俱單之、遲之也。喻天下有賢者、在位之人、將久如而並求、致之於朝、亦遲之也。遲之者、謂至誠也。

毛傳…長江、漢水一帶は魚の産地である。單單は筥（注1）である。

鄭箋…烝は塵のこと。塵然とは久如という意に近い（注2）。句意…「南方の河には良い魚がたくさんいる。人々は久如として待ちかねたように、俱に魚獲籠でとろうとして、これを待ちかまえる」。天下に賢者あれば、已に位に在る人々は久如として待ちかねたかのようにこれを捜し求め、その賢者を朝廷に仕えさせようとし、大いにこれを遅つ「待ち望む」。

「遲之」とは至誠の心で「真心を尽くして」これを待つ、という意味である。

注

（1）單單 『經典釋文』に「張教反。「チョウ」徐又都學反「タク」。

筥也。「字林」、竹卓反「チャク」。云捕魚器也」とある。『康熙字典』は『廣韻』を引いて、都教切とする。現代の通音はトウ。また、筥は『經典釋文』に「助角反。郭「璞」云、捕魚籠也。沈音穫、又音護。説其形非單也」とある。魚を取る籠、ここは動詞の用法。籠を設しつちえる。「單單、筥也」とあるが、「單、筥也」の意味。ただし、名詞ではなく、動詞としての用法。

（2）烝然 『經典釋文』には「之承反「ジョウ」。鄭、塵也。王、衆也」とあり、鄭玄が塵ととる説「鄭玄は、塵然は猶ほ久如、というので、塵は久しいの意味ととっている」を挙げるとと

もに、烝を衆むねい、従つて烝然を多い貌、ととる王（肅）説をも挙げてゐる。

君子有酒 君子に酒有り 君子の家にはお酒がたくさんある

嘉賓式燕以樂 嘉賓は式もつて燕し以て楽しましむ 在野の賢者「嘉賓」にこの美酒をふるまい、彼等と燕飲し、飲

樂を尽くしたい

箋云、君子斥時在位者也。式用也。用酒與賢者燕飲而樂也。

鄭箋…君子とは当時、位「高官」に在った者。式は用「用いる」の意である。酒を用意して賢者と燕飲して楽しむこと。

〔疏〕南有至樂（校1）

○正義曰、言南方江漢之間有善魚、人將久如俱往、單而單。此善魚者人之所欲、已自將單以求之、則思遲此魚、皆欲得之矣。以興在野天下之處有賢者、時在朝君子、久如並各樂而求之、有至誠之心。思遲此賢者、欲致之於朝（校2）、猶單者之願魚也。君子既至誠如此、遂得賢者共立於朝。君子之家有酒矣。在野賢者嘉善之賓、既至用此酒、與之燕飲、以復歡樂耳。心遲其來、至即嘉樂。是至誠樂與賢也。

校正

（1）南有至樂 單疏本、「南有至以樂」に作る。足利本・元刊本・閩本・監本・毛本・阮本、「南有至樂」に作る（殿本・全書本は標起止「標題」なし）。

（2）欲置之於朝 單疏本・元刊本・閩本・監本・毛本・殿本、「欲

致之於朝」に作る。足利本・阮本、「欲置之於朝」に作る。

阮元「校勘記」に「閩本・明監本・毛本、置作致。案所改是也」とある。「致」に作る方が、より適切であろう。

〔疏〕南有より楽に至るまで

○正義…「この章句の句意」南方、江漢の間「長江、漢水の間」には善い魚がたくさんいる。人々は久如として共に往き、魚かごをかけ、魚かごをかける（注1）。この善い魚は皆が手に入れたいと願うものであり、私自らかご網を用いてこれを取ろうとするのは、是非この魚をほしいと待ち望み（注2）、皆がこの魚を手に入れたいと願うからである。

と言つて、「野に在る天下すべての賢者たちを、時に朝廷に在る君子達は久如として、待ち望み、みなそれぞれ好んで積極的に彼等を求め、至誠の心をもって賢者（の来るの）を待ち望んでいる。」ということを行い興している。

在位の君子が（この在野の）賢者たちを待ち望み、彼らを朝廷に置きたいと思うのは、ちょうど魚籠で魚を取る者が魚をたくさん手に入れたいと願うようなものである。在官の君子がこのように至誠をもつて迎えようとしたので、首尾良く賢者たちを迎えて、彼等と共に朝廷に立つことができた。その君子の家にはお酒がたくさんある。在野の賢者は君子の嘉いお客様。彼等がやって来てくれたので、この美酒をふるまって彼等と燕飲し、歓楽を尽くすのである。心に賢者の来るのを待ち望み、賢者が来れば彼等を欲待し樂しませる。これが、序文の「至誠、樂與賢（至誠もてまぢ、賢と與に「するを」樂しむ）」の意味

するところである。

注

(1) 魚かごをかけ、魚かごをかける この前後の文章、句切り方に異説がある。原文「人將久如俱往罽而罽此善魚者人之所欲」どこで句切るかの問題であるが、下の正義に、「重云罽非一也」、「重言罽、衆自明矣」と云っていることから、「罽而罽」で切れるものとした。

『儒藏』經部詩類『毛詩注疏』では、「人將久如俱往罽。而罽此善魚者、人之所欲。」と句切っている。國立編譯館『毛詩正義』では「人將久如俱往罽。而罽此善魚者、人之所欲」とする。両者ほぼ同じ（後のつながりがやや異なるようであるが）。「人將久如俱往罽。而罽此善魚者、人之所欲」は「人、將に久如として俱に往き罽せんとす。而ち此の善魚を罽するは、人の欲する所なり」と読んでいたのであろう。「人之所欲」の主語が「罽此善魚者」となるのは、不自然ではなからうか。ほしいと待ち望み 原文「思遲此魚」。この遅について、『後漢書』章帝紀に「朕思遲直士、側席異聞。」の李賢注に「遲、猶希望也」とある。

○傳江漢至筐也

○正義曰、言南、知江漢間者、以言善魚南方魚之善者莫善於江漢之間、且言善魚者、謂大而衆多、多大之魚、必在大水。南方大水、唯江漢耳。必取善魚者、以喻賢者之有善德也。此實興、不云興也、傳文略、三

章一云、興也。擧中、明此上下、足知魚離皆興也。

釋器云、「筩謂之罩。」李巡曰、「筩編細竹以爲罩、捕魚也。」孫炎曰、「今楚筩也。」郭璞曰、「今魚罩。」然則罩以竹爲之、無竹則以荆、故謂之楚筩。

重云罩罩、非一也。

○正義：「南」とだけあるのに、それが「江漢の間（長江と漢水の間）」であることが分かるのは、善魚で、南方の善魚といえ、江漢の間（にとれるもの）より良いものはない。しかも善魚といっているのは、その魚は大きくてしかもたくさんいるということであり、たくさんのおおきな魚は大河にしかない。南方の大河といえ、ただ長江・漢水に限られるからである。

（この句で）善魚（詩の「嘉魚」）の語を用いねばならなかったのは、これを善徳ある賢者に喩えるためである。ここのところは実際は「興」であるのに、（毛傳で）「興」と云っていないのは、毛傳の文章が質略「簡略」であるからで、三章にのみ「興なり」と云っている。（このように四章立ての詩句の）中間に「興」と提示していることから、明らかに、この上下（の章の）「魚」「離」も「興」であることを知ることができる（注1）。

『爾雅』『釋器』に「筩謂之罩（筩、又音、ゴ）之を罩と謂ふ」とある。李巡は「筩とは細い竹を編んで罩を爲る、魚を取るか」という。孫炎は「今の楚筩である」という。郭璞は「今の魚罩」という。だとすれば、罩は竹でもって作り、竹がなければ、荆でもって作るのであり、だからこれを楚筩と謂うのである。

罩罩と重ねたのは、その動作が一度だけではない事「罩而又罩」ということ」を意味している（注2）。

注

(1) この上下（の章の）「魚」「離」も「興」この毛傳では三章とも興体であるとみなす正義の解釋について、李庶常は「傳于三章始言興、則後二章是興、而前二章爲賦」と言い、続けて「序言太平君子至誠、樂與賢者共之。毛意蓋謂君子思魚御賓、相與燕樂也。傳云、江漢之間、魚所産也。罩罩筩也。似不見有至誠意。然『文選』潘安仁〈西征賦〉云、『紅鮮紛其初載、賓旅竦而遲御（紅鮮紛として其れ初めて載けられ「設けられ」、賓旅竦みて御を遅つ）』李善註毛萇『詩傳』曰、『南方有魚、遲之也。』是唐初本首有此二句。言君子思待此魚、以燕嘉賓、至誠如是。傳箋意別。正義以箋述之誤也。」（『毛詩紬義』）と、唐代初めの毛傳には「江漢之間、魚所産也。罩罩筩也」の前に「南方有魚、遲之也。」の句があったこと、そして毛傳の意味するところは、君子がこの魚を手に入れて賓客を御し、相共に宴樂しようと思いつつ「願う」、このようにも賓客に真心をつくしている、ということであろうと言う。毛傳と鄭箋の解釋は異なっている。

(2) 罩罩、原文「重云罩罩、非一也」。これは罩すという動作・事柄が一度ではない、何度も罩する、「罩而又罩（罩し又た罩す）」という意味であろう。「罩罩、取之不已也。」（范氏説『呂氏家塾讀詩記』所引）。「嘉魚羣然入網、罩之又罩、取之

不竭」(『呂氏家塾讀詩記』)等、同じ方向の意味。

以下の正義による鄭箋の解釈によれば、魚を求める人が多
い、またその譬喩である(在野の賢者を求める)在位の人が
多い、たくさんの人が罽する(ある人が罽し、またある人が
罽す)、ことと取っている。その場合、「非一也」とは、一人
だけでなく、あちらの人もこちらの人も、といった意味とと
ることになる。

また、このことについて、王安石は陸農師の説「太平之君
子至誠樂與賢者共之、而所以求者上籠之如罽、下撩之如汕、
至誠之道也。淮南子曰：『罽者抑之、罽者擧之。爲之雖異、
得魚一也。』」を引いて、「觀此、則知詩人先言罽、後言汕者、
以見其求賢無方也。」という(『詩義鉤沉』中華書局、
一九八二年刊)。陸佃(農師)は王安石の学生。陸佃の説は
ほぼ同文が『呂氏家塾讀詩記』(四部叢刊)にも引用されて
いる。罽は上から籠をかぶせて魚を捕ること、汕とは下から
すくい上げるようにして魚を捕ること。詩に先に罽と言ひ、
後に汕と言うのは、その両方の捕獲法を用いるように、様々
な方法で賢者を求めることを表しているとする。

○箋烝塵至至誠

○正義曰、「烝、塵」、「釋言」文。「釋詁」云、「塵、久也。」鄭欲烝爲
久、故言「烝、塵」也。又云、塵然猶言久如。是以塵爲久、然爲如也
(校1)。不言烝爲衆者、以此罽魚喩求賢、久如欲往罽之、是欲魚之甚。
以興君子久如欲求賢爲思遲之極、若以爲衆、止見求魚之多(校2)、

無關思遲之義、則於至誠之事不顯。故云、「遲之謂至誠也」。重言罽、
衆自明矣。不假復言衆也。故云、「人將俱往」、是衆可知。喩天下有賢、
在位之人、久如並求之、斯即在朝之君子、衆皆求賢。其「並」與「俱」
皆出『經』重「罽」而求也。

校正

(1) 塵然猶言久如。是以塵爲久、然爲如也。足利本・元刊本・閩
本・監本・毛本・殿本・阮本、「塵然猶言久然爲如也」に作る。
單疏本・『要義』(徽州本・光緒本)、「塵然猶言久如。是以塵
爲久、然爲如也」に作る。阮元「毛詩校勘記」に「案久下當
脱(如塵爲久)凡四字。以久字複出而誤也」という。單疏本
等に「塵然猶言久如。是以塵爲久、然爲如也」とあるのに従
う。

(2) 止見求魚之多。單疏本・閩本・監本・毛本・阮本・殿本・全
書本、「止見求魚之多」に作る。足利本・元刊本、「上見求魚
之多」に作る。阮元「校勘記」に「閩本・明監本・毛本、上
作止。案所改是也」という。「止」に作るのが妥當。

○鄭箋の烝塵より至誠まで

○正義：「烝は塵」というのは『爾雅』『釋言』の文。「釋詁」には、「塵
は久なり」とある(注1)。鄭玄は烝を久の意味に取るうとしたので、
(これらを踏まえて)「烝は塵」と言ったのである。また「塵然猶ほ
久如と言ふがごとし」と云っている。つまり、「塵」を「久」と取り、
「然」を「如」(の用法)と取っている。烝を衆(多い)の意としてい

ないのは、この「魚を罫す」〔竹で編んだかごとる〕ということ
賢者を求めることに喩え、久如として心待ちにして（魚を捕りに）往
き籠網をかけようとするとするのは、必死に魚を求めようとすること
と取るからである。君子が久如として賢者を求めようとして思い待つ
ことの極みであることを言い起こしているとする爲である。もし、「罫」
を「衆（多い）」の意味にとれば、ただ魚を捕ろうとする「人」が多
いということを表すだけで、「思遲」の意味と関係がなくなってしまう。
つまり、「至誠」のことがはっきりと表れない。だから、「之を遅する
とは至誠を謂ふなり」と云っているのである。

（詩に）「罫罫」と重ねて言っているので、（人が）「衆（多い）」こ
とは自ずから明かである。なので、更に「衆（多い）」と言うことを
よしとはしなかったのである。だから、「人將俱往（人、將に俱に往
かんとし…「在位の」人々は皆共に往こうとして）」といってお
り、これから（人が）「衆い」のであることは自ずから知られる。これは
天下の賢者を、今在位の人々が久如として求め（「在位之人久如、並
求之（在位の人久如として並に之を求め）」）ることを喩えている。す
なわち、朝廷に在る君子達が衆く皆（野に在る）天下の賢徳有る者を
求めているのである。その（鄭箋の）「並」と「俱」とは、どちらも
經文が「罫罫」と罫を重ねている（「罫し罫し」）ことから求められ、
出てきているものである。

注

（一）『爾雅』「釋詁」に「曩、塵、佇、淹、留、久也（曩、塵、佇、
淹、留は久なり）」とある。「久如」の「如」は「然」と同じ

働きの語（語尾助詞）とすれば、「久しい貌」「久しく」、待
ち望んで」といった意味となろう。

○箋君子斥時在位者

○正義曰、鳧鷖與此序皆云太平之君子。彼注云、君子謂成王（校一）、
與此不同者、以彼序云、能持盈守成則神祇祖宗安樂之矣。經陳祭天地
宗廟、是太平之君子爲百神之主、非王不然、故知君子謂成王。此序云、
「樂與賢者共之」、言與言共是等夷之稱、非人君之辭、故知斥在位者也。
且人君求賢至誠不足以爲美矣。人臣事君、多在專利、以文仲之賢、尚
稱竊位、知賢不妬、自古所稀。假有舉薦、或事不獲已。至誠者寡。今
太平君子、至誠樂賢、故所以爲美耳。下章箋曰、君子下其臣、故賢者
歸往之、似斥成王者。此言君子博聞朝廷公卿、『孝經』唯士言爭友大
夫以上、則有爭臣。是公卿之於下民有臣之道、且人之進賢、唯善所在。
公叔文子升家臣於公（校二）、所樂之賢、或是已之私屬、故箋言臣以
通之。王肅・孫毓亦以爲在位朝廷之求賢、則毛亦不斥成王、明矣。

校正

（一）彼注云、君子謂成王 單疏本・足利本・元刊本・閩本・監本・
毛本・阮本・殿本・全書本、皆同じ。異本なし。阮元「校勘
記」に「案浦鐘云、斥諛謂、是也。正義下云、則毛亦不斥成
王、明矣。是本引此作斥也。」と云う。この正義の下の所「則
毛亦不斥成王、明矣」とあって、本はこれを引いて「斥」に
作っていた、という。しかし、「鳧鷖」の鄭注に「君子斥成

王也」(相臺岳氏本『毛詩鄭箋』)とあるのに依る、というべきであろう。ここは、各本同じであるので、強いて変えることはしない。

(2) 升家臣於公 單疏本・閩本・監本・毛本・殿本・全書本・『要義』(徽州本・光緒本)、「升家臣於公」に作る。足利本・元刊本・阮本、「升家臣以公」に作る。阮元「校勘記」に「閩本明監本毛本以作於。案所改、非也。正義所引自如此。」という。單疏本・『要義』に既に「於」に作っており、「升家臣於公」とする。

○鄭箋の君子斥時在位者について

○正義・「鳧鷖」(大雅「生民の什」)の序とこの序は、共に「太平の君子」と云っている。彼処の鄭注では、その君子とは成王のことを謂うとあって、この序とは異なっている。「鳧鷖」の序では、「能持盈守成、則神祇祖考、安樂之矣(「太平之君子」能く盈を持し、成を守れば、則ち神祇祖考、之に安樂す)」(注1)とあり、詩の本文では天地・宗廟を祭ることを陳べており、この太平の君子は百神の主であるので、王でなければその役割は果たせない。だから、君子とは成王であることが分かる。

この序では「樂與賢者共之(賢者と之を共にするを楽しむ)」とあり、「與」と言い、「共にする」と言っているのは、等夷「同列」の物の言い方であって、人君のことをいう言葉つかいではない。それゆえ、ここは在位の者を指していることが分かる。しかも人君が賢者を求めること至誠であるのは、格別美となすには当たらない。臣下が君主に事

えるのは、その多くは利益を専らにすることにあり、賢者の臧文仲ですらなお「位を竊む」(高い位につきながらその職責を十分に果たさない)と言われたりしており(注2)、賢者が妬まれないというのは、古より稀なことであることが分かる。假に推挙することがあっても、或いは職分上、已むを得ず推挙しているだけであり、真心から推挙する場合が少ない。今、太平の君子が至誠から賢者が位に就くのを喜ぶので、これは誉め称えるに値するのである。

下の章の鄭箋で「君子下其臣、故賢者歸往之(君子、其の臣に下る、故に賢者、之に歸往す)」とあっており、この君子とは成王を指しているようである。しかしここで君子と云っているのは、博く朝廷の公卿たちのことに関していっている。『孝經』によれば、唯だ士のみについて争友「諫争の友」と言い、大夫以上には争臣「諫争の臣」有り、ということになる(注3)。これは公卿と下民との関係では、その間には臣としての道があることを意味している。且つ人が賢者を薦めるのは、ただ善であるかどうかを基準とするものであり、公叔文子は家臣を(衛の)朝廷(の大夫)に昇進させたのは、楽しむ「期待する」所の賢者であった(注4)。或いはこれは自分の家臣であったかもしれない。このようなことから、鄭箋で、臣「時の在位の者」と言っていて、これらの例と意味が通じ合うようにしたのである。王肅・孫毓も、朝廷に在位しているものが、賢者を求めると考えている。そうであれば、毛公もまたここでの太平の君子は成王のことを指してはいないとしていることは明らかである。

注

(1) 能持盈守成、則神祇祖考、安樂之矣。正義は「致太平之君子成王、能執持其盈滿、守掌其成功、則神祇祖考皆安寧而愛樂之矣」とパラフレイズしている。

(2) 賢者の臧文仲（『論語』「衛靈公」に「子曰、臧文仲其竊位者與。知柳下惠之賢、而不與立也」とある。）。

(3) 『孝經』によれば、『孝經』「諫諍」に「子曰、……昔者天子有爭臣七人、雖無道不失其天下、諸侯有爭臣五人、雖無道失其國、大夫有爭臣三人、雖無道不失其家、士有爭友則身不離於令名、……」とある。

(4) 公叔文子（『論語』「憲問」に「公叔文子之臣、大夫僕與文子同升諸公。子聞之曰、可以爲文矣（公叔文子の臣、大夫僕、文子と共に公に升る。子、之を聞きて曰く、以て文と爲す可きかな、と）」とある。）衛の大夫、公叔文子が自分の家臣である僕を推薦して、自分と同じ衛の大夫としたことをいう。

南有嘉魚 南に嘉魚有り 南方にはたくさん魚がいる

烝然汕汕 烝然として汕汕 「汕をかけ油をかけ」待ちに待ったように網をかける

毛傳…汕汕、櫟也。

箋云…櫟者今之撩罟也。

毛傳…汕汕は櫟「魚を捕る網」（注1）である。

鄭箋…櫟とは今の撩罟（注2）である。

注

(1) 櫟 『經典釋文』に「側交反、字或作翼、同」とある。音、ソウ。

(2) 撩罟 『爾雅』「釋器」に「罟謂之汕」とあり、その郭璞注に「今之撩罟」とある。魚取り網、すくいあみ。

疏 傳汕汕櫟

○正義曰、釋器云、櫟謂之汕。李巡曰、「汕以薄魚也。」（校1）孫炎曰、「今之撩罟。」皆以今曉古。

校正

(1) 李巡曰汕以薄魚也 足利本・元刊本・阮本、「李巡曰汕以薄魚也」に作る。單疏本、「李巡曰汕以簿汕魚也」に作る。閩本・監本・毛本・殿本・全書本、「李巡曰汕以薄汕魚」に作る。阮元「校勘記」に「閩本・明監本・毛本、〈魚也〉作〈汕魚〉。案『爾雅』疏引作『汕以簿汕魚也』。此當〈汕〉・〈也〉並有、各脫其一。」という。

先ず「簿」と「薄」について、竹冠・草冠のどちらに作るのも正しい。混用されることが多い。魚とり網。因みに校勘記所引の爾雅疏も阮元本では簿に作っている（『毛詩注疏』小雅 訳注（二）「魚麗」篇「校正」及び「曲簿」注参照）。單疏本に「李巡曰汕以簿汕魚也」（李巡曰く、汕は簿を以て魚を汕するなり）に作るのが妥當であろう（汕を説くに汕

を用いるのに違和感があるが。「李巡曰汕以薄魚也」に作っているのは、「李巡曰く、汕とは以って魚に薄るものなり」と読んだのであろうか。

〔疏〕毛傳の「汕汕、櫟」について

○正義・『爾雅』「釋器」に云う、「櫟とは汕のこと」。李巡は「汕とは薄「魚を捕る籠」で魚をとるもの」と云う（注1）。孫炎は「今の撩苦」と言っている。李巡・孫炎とも、その時代の物で古のことを明らかにしようとしている（注2）。

注

(1) 『經典釋文』では、「汕汕、所諫反、櫟也。」とする一方、『説文』云魚游水貌」と『説文』を引いて、汕汕とは「魚游水貌（魚が河を泳いでいる貌）」とする。後者の説では「烝然汕汕」は「たくさんたくさん、魚が河を泳いでいる」といった意味となるう。

(2) その時代の物で「以今曉古」、『爾雅』疏に云う「以時驗而言也」とほぼ同じ。

君子有酒 君子にはたくさん酒がある

嘉賓式燕以衍 嘉賓は式で燕し以て衍しましむ 嘉賓にはこの酒をふるまってもてなし、大いに楽しんでいただく

毛傳：衍、樂也。

毛傳：衍とは楽しませること。

南有樛木

南に樛木有り 南方に樛然と枝を垂らしている木がある

甘瓠纍之

甘瓠、之に纍む 甘瓠が之に纍みついていく

毛傳：興也。纍、蔓也。

箋云、君子下其臣、故賢者歸往之。

毛傳：興である。纍は蔓のこと。

鄭箋：君子がその臣下にへりくだるので、賢者がその君子のもとに向かつて身を寄せていく「心を寄せて趣く」。

君子有酒 君子にはたくさん酒がある

嘉賓式燕綏之 嘉賓はこれを式で燕し之を綏んず 賓客にはこの酒をふるまってもてなし、安らいでいただく

箋云、綏、安也。與嘉賓燕飲而安之。郷飲酒曰、賓以我安。

鄭箋：綏とは安んずること。嘉賓と酒食を共にして、これをもてなし安らいでもらう。（儀禮）「郷飲酒禮」に「賓、我を以て安んぜよ」とある（解釈等、「疏」参照）。

〔疏〕南有至綏之

○正義曰、言南方有樛然下垂之木、甘瓠之草、得上而纍蔓之（校1）、以興在位有下下之君子、故在野賢者得往而歸就之。言君子之下猶樛木之下垂、賢者所以往矣。則用此酒燕飲而安之。

校正

(1) 得上而纒蔓之 單疏本・足利本・元刊本・閩本・監本・阮本・殿本・全書本、同じ。毛本、「得上面纒蔓之」に作る。「校勘記」に「毛本、而誤面」という。

〔疏〕「南有」より「綏之」に至るまで

○正義…「南方に樛然として枝を曲がり垂らしている木があり、甘瓠の草がこれに上っていつて絡まりついている」といつて、「在位の者が下位の君子にへりくだるので、在野の賢者がその在位の高官の下に趣き、身を寄せる」ということを導き出している。君子が下の者にへりくだるといふことは、樛木が枝を下に垂らすことに似ており、(君子がそのような態度を取るので)賢者たちがその君子の下に趣くのである。そうすれば、君子はこの酒でもつて燕飲し、賢者を樂しませる。

○箋郷飲酒曰、實以我安

○正義曰、案「郷飲酒」、燕飲而安之(校1)、無「以我安」之文。「燕禮」「司正洗觶、南面、奠于中庭、升、東楹之東受命、西階上北面、命卿大夫曰、「君曰、「以我安。」卿大夫皆對曰、「諾、敢不安。」則此文在「燕禮」矣。言郷飲酒者誤也。定本亦誤。以南陔與由庚之箋皆郷飲酒燕禮連言之。故學者加郷飲酒於上、後人知其不合兩引、故略去燕禮焉。今本猶有言燕禮者。

校正

(1) 案「郷飲酒」、燕飲而安之 單疏本・足利本・元刊本・閩本・

監本・毛本・阮本・殿本・全書本、「毛詩要義」(徽州本・光緒本、「南有嘉魚」)と同じ。阮元「校勘記」に「案浦鍾云、「下五字當衍文」、是也。此寫者涉上文而誤」とある。妥當な見解であろう。訳文はこの五字を残したままとした。

○鄭箋の「郷飲酒曰、實以我安」について

○正義…「郷飲酒」礼には燕飲して之「賓客」を安んずる際の部分に「以我安」の文章はない。「燕禮」には「司正洗觶、南面、奠于中庭、升、東楹之東受命、西階上北面命卿大夫曰、君曰、以我安。卿大夫、皆對曰、「諾、敢不安。」(司正「賓主の礼を正す者」觶を洗ひ、南面して中庭に奠し、升りて、東楹の東に命を受け、西階上にて北面し、卿大夫に命じて曰く、君曰く、我を以て安んぜよ、と。皆對へて曰く、諾。敢へて安んぜざらんや、と。…司正が角觶を洗い庭の中央に来て、南に向かつて坐し、觶を地上に置き、西の階段より升り、東楹の東において君命を受け、その後西の階段のところに行つて北に向かつて卿大夫に対して君の命令を發布して言う、「君主は言われました、『どうぞ皆様にはごゆっくりとおくつろぎください』とのことです」。卿大夫は皆それに答えて『分かりました。ゆっくりくつろがせていただきます』という。」とある(注1)。つまり、この文章は「燕禮」に在るものであつて、「郷飲酒」と言っているのは誤りである。定本も誤っている。「南陔」と「由庚」の鄭箋のどちらにも「郷飲酒」「燕禮」と連言しているので、学者が(こ)こも本来の「燕禮」の(こ)上に「郷飲酒」の語を加えたもので、後の人々は、両方ともは引くべきでないと考え、「燕禮」という語を省略したのである。今のテキストにはなお「燕禮」

の語を残しているものがある。

注

(一) 「燕禮」「儀禮」「燕禮」に、ほぼ同文「司正洗角觶、南面坐、奠于中庭、升、東楹之東受命、西階上北面、命卿大夫曰、『君曰、『以我安卿大夫。』』皆對曰、『諾、敢不安。』』とある(傍点部分のみ異なる)。

翩翩者騅

翩翩たるは騅す ひらひらと飛ぶのは騅の鳥

烝然來思

烝然として來思す 久しく專一な志を持ち続け、(在位の君主もまた) 久賢者の來るのを待ち望んでいた

傳・騅、壹宿之鳥。

箋云、壹宿者、壹意於其所宿之木也。喻賢者有專壹之意於我。我將久如而來遲之也。

毛傳・騅とは壹宿の鳥。

鄭箋・壹宿とは宿っている木にあくまでも棲みつづけるの意味。賢者が私に対して專一の心を持ち続けていることを喩えている。私も久如としてこのところからこの賢者を待ち望む。

君子有酒 君子に酒有り 在位の君子の家にはたくさん酒がある
嘉賓式燕又思 嘉賓は式つて燕し又た思ふ この野に在った賢者たち

ちはよいお客様であり、彼らが来てくれたので、この酒を振る舞って、宴飲し手厚くもてなそう

箋云、又復也。以其壹意、欲復與燕、加厚之。

鄭箋・又は復た「さらに」するの意。賢者の心が專一であるので、

私も彼らと再び燕飲し、手厚くもてなす。

疏 翩翩至又思

正義曰、上章云、君子思遲賢人、此章言賢者願往。翩翩而飛者、是騅鳥也。此鳥由壹意於其所宿之木、故久如欲來、所以翩翩而飛來集於木也。以喩在野之賢者有專壹之意、我君子(校一)亦久如願來、今來在於我君子之朝、言君子求之至、故賢者意能專壹也。在位君子之家有酒矣。此在野賢者嘉善之賓、既來用此酒與之燕又燕也。思皆爲辭。燕又燕、類與之燕、言親之甚也。

校正

(一) 有專壹之意、我君子 阮元「校勘記」に「案我上當有於字」という。單疏本・足利本・元刊本・監本・閩本・毛本・殿本・全書本・阮本、すべて「有專壹之意我君子」に作る。補わず、各本のままとした。

疏 の翩翩より又思まで

正義・上の章句では君子が賢人を思い待ちわびることを云っており、この章句では賢者が(君子のところへ) 往きたいと願っていることを言っている。翩翩と飛んでいるのは、騅の鳥。この鳥は自ら宿っている木にひたすら宿り続けるので、久如として待ち望むようにやっつてこようとしていた。かくて、翩翩としてこの木に飛來して集まってくる。これは、在野の賢者が專一の心を持っているので、我が君子もまた久如として心から彼らの來るのを待ち望んでいる。今や賢者は我が君子

の屬する朝廷に在任している、これは君子が彼らを真心を持って求めたことを意味しており、賢者たちも心を専一にして（仕えることが）できることを諭えている。在位の君子の家にはたくさん酒がある。この野に在った賢者たちはよいお客様であり、彼らが来てくれたので、この酒を振る舞って、彼らと宴飲しまた宴飲しよう。「思」というのは助辞。「燕又燕」とは、しきりに彼らと飲み交わすこと、大変親しむことを意味している（注1）。

注

(1) 「燕又燕」とは、この「燕又燕」以下の文章は、疏にさらに注を施したものである。

○箋云、壹宿至遲之

○正義曰、毛言壹宿義微、故申之云、「壹宿者、壹意（校1）於其所宿之木也。」夫擇木（校2）之鳥愨謹、故將宿於木、專壹其心、故特以雛鳥爲喻。以鳥之擇木、喻賢者有專壹之意於我。此我謂君子也。「將久如而來、遲之」者、賢者遲君子、物類相感、所以相思遲之也。『定本』「式燕又思」下有「箋云又復」也。以其壹意欲復與燕、加厚之也。俗本多無此語。

校正

- (1) 壹意 足利本・元刊本・阮本、「一意」に作る。單疏本・閩本・監本・毛本・殿本・全書本、「壹意」に作る。
- (2) 擇木 足利本・元刊本・閩本・監本・毛本・阮本、「擇木」

に作る。單疏本・殿本・全書本、「不」に作る。「夫不」は雛の別名。一般的に「木を擇ぶ鳥が愨謹」というのは無理があるもので、「夫不の鳥は愨謹」とある方が、「夫れ木を擇ぶの鳥は愨謹」とあるより勝る。「按勘記」に「案此當作雛夫不之鳥愨謹。用四牡傳箋之文也」とある。「四牡」の毛傳に「雛夫不也」とあり、鄭箋に「夫不鳥之愨謹者、人皆愛之」とある。

○箋云、壹宿から遲之まで

○正義・毛傳では壹宿の意味がはっきりしないので、鄭箋ではこれを敷衍して「壹宿者、壹意於其所宿之木也壹宿とは其の宿る所の木に壹意なるなり」と云っている。夫不鳥「雛」は質実で謹み深いので、（擇んでその）木に宿ろうとした以上は、その心を専一にして（その木に宿り続けようとする）。それで、特に雛鳥を喩えに用い、鳥が木を擇ぶことでもって賢者がひたすら私に心を寄せてくれていることを喩えている。「於我」の我とは、君子を指している。久如として（賢者の来るのを）待ちわびるとは、賢者が君子を待ち望めば、類は類を相感し合い、互いに待ち望むのである。定本では「式燕又思」の下に「箋云又復也」とある。そのところが壹意であるので（宴飲した上で）またさらに賢者たちと宴飲し、手厚さを加える、という意味となる。俗本では多くこの語がない。

南有嘉魚四章章四句「南有嘉魚」四章、章ごとに四句